

相次ぐ「米国発」テロ攻撃！

パンデミックのさ中、キューバが国内外の人々の命を救うため奮闘している一方で、米国はキューバ、ベネズエラへの制裁を強め、人々の命を危険に晒している上、米国政府の直接、間接的関与のもとキューバ人、ベネズエラ人の命を狙うテロ攻撃が頻繁に起きています。

4月30日未明、ワシントンの在米キューバ大使館に32発の銃弾が撃ち込まれました。当日、大使館には10人の大使館員がいましたが幸い犠牲者はありませんでした。

実行犯は極右政治家と親交が深い反キューバ活動家で、「全て破壊するつもりだった。人がいればもちろん殺した」と殺意を認めています。トランプ政権の反キューバ政策に触発された可能性も十分に考えられますが、当の米国政府は一言のコメントも出さず、キューバに対し捜査状況の説明も一切していません。



大使館前のホセ・マルティ像も被弾

また、5月2日、ベネズエラのグアイラ州の漁村チュアオに武装した傭兵グループがランチャーで押し寄せ、地元漁民、警察、軍が一体となって米国人2人（元トランプのセキュリティ要員と元グリーンベレー）を含む8人を拘束しました。この侵攻は「ギデオ作戦」の一部で、調査が進むにつれ、グアイド（自称大統領）、米国政府、コロンビア政府の関与が明らかになってきています。

最大のテロ国家が完全に牙を剥いた今、まったく予断を許さない状況です。



拘束された米国人2人を含む傭兵たち

キューバ訪問団報告集 好評発売中

頒価 800 円

革命60年のキューバを記録したレポート集です。ぜひお求め下さい！

会費協賛と CUBAPON活動協力カンパを呼びかけます



中南米情勢が緊迫しています。

CUBAPONはキューバ連帯の旗を掲げると同様に、中南米の人民の闘いと状況を発信します。

ICAPよりコロナ禍に伴うお見舞いメッセージ

ほぼすべての国がコロナウイルスと決定的な闘いに向き合っている現在の世界情勢の中で、私たちはこの友情のメッセージが日本のすべての友人たち、特に、常にキューバとキューバ革命への支持を表明してくれているCUBAPONのメンバーに届いてほしいと願っています。

私たちの島も、既に世界中の何千何万の命を奪った病気との闘いを展開しています。

世界的に知られている私たちの医療システムは、現在、コロナウイルスに苦しむすべてのキューバ人へのケアを維持しており、病気の感染を防ぐため必死で取り組んでいます。それだけでなく、私たちの国は支援を求める国々に応えて、全ての大陸に医療の専門家たちを送り、それらの国で伝染病とともに闘う医療支援を実現しています。

こうした状況にも関わらず、米国政府は対キューバ経済・金融・通商封鎖の政策に固執しています。このため、最近、コロナウイルスとの闘いを支援するために寄贈された重要な医療物資のキューバへの引き渡しが拒否されています。これはキューバ国民の命を削る行為です。

私たちは、皆さんから寄せられているキューバを支持し米国による経済封鎖に反対するメッセージに対し、改めて感謝申し上げます。

皆さんも同様に大変な被害を受けているこの病気との、貴国における闘いが前進することを願っています。

CUBAPONのメンバーの皆さん、そしてそのご家族、ご友人など身近なところで命を失うようなことがないよう心から願っています。このメッセージとともに、すべてのキューバ人、特にICAP指導部とそこで働く私たちからの熱い抱擁をどうぞ受け取ってください。

2020年4月9日

ラファエラ・バレリーノ
(ICAPアジア・オセアニア担当部長)



新自由主義・パンデミックと闘う中南米

世界は今、新型コロナウイルスによるパンデミックで大きく揺れている。恐るべき感染力の新型ウイルスは政治体制や経済状況を問わず全ての国に拡がり、各国の知恵と手腕を試しているようにさえ思える。

昨年中旬あたりから反ネオリベリズムの動きが大きな高まりを見せた一方、クーデター策動に揺れた中南米の各国も等しくこの冷酷なパンデミックに晒されている。長い夜がいつ明けるのか誰にもわからないが、中断された形となった闘いはパンデミック後に引き継がれることを信じ、またパンデミックといかに向き合っているか触れながら中南米の特徴的な動きを見ていくこととする。

■ 新自由主義との闘い—エクアドル・チリ・コロンビア



目覚めたチリ、サンティアゴで開かれた 120 万人集会

昨年 10 月 2 日、エクアドルのレニン・モレノ大統領は国際通貨基金からの数十億ドルの融資と引き換えに緊縮政策（パケタソ）を実行すると発表した。レニン・モレノはラファエル・コレア左派政権で副大統領をつとめ、後継者としてコレアの強力なバックアップを受けて大統領選に勝利した直後、掌を返してコレアを政治亡命に追い込み、新自由主義の走狗となった人物である。

緊縮政策で燃料補助金撤廃を提示された運輸労働者は翌日ストライキに入り、7 日には先住民グループが大挙して首都キトに押し寄せた。首都を脱出してグアヤキルに逃れたレニン・モレノ大統領は 10 月 14 日、緊縮策を撤回したが、それまでの弾圧で死者 10 人、負傷者 2 千人と多くの血が流された。

エクアドルの闘いと入れ替わるようにチリの労働者、年金生活者、学生たちが「チリは目覚めた」を合言葉に街頭に出た。引き金となったのは 10 月 7 日に発表されたラッシュアワー時の地下鉄運賃の 30 ペソ（日本円で 4 円）値上げだが、それさえ厳しい生活実態に加え、経済大臣の「早起きして安い時間に乗ればよい」との発言が怒りに油を注いだ。地下鉄の駅で集団的に改札を飛び越え抗議する中高生たちに続き、低賃金に喘ぐ労働者、大学を出るまでに多額の借金を背負わされる青年層、年金で食べていけない高齢者など、あらゆる世代の人々が怒りの声を上げた。彼らは「30 ペソじゃない。30 年だ」と口々に叫んだ。30 年というのは、80 年代半ばからチリで進められてきた国営

企業の民営化、医療、福祉の切り捨てなどの一連の新自由主義的経済改革を指す。始まったのはピノチェト独裁政権下で、主導したシカゴ大学出身の経済学者ミルトン・フリードマンはノーベル経済学賞を受賞し、「チリの奇跡」として囃されたが、新自由主義の実験場にされたに過ぎない。30 年の後にチリ国民に残されたものは貧困であった。

地下鉄料金の値上げは翌週には撤回され、最低賃金引き上げなど懐柔案も出されたがチリ国民の蓄積された怒りは収まらなかった。チリの首都サンティアゴのディグニダード（「尊厳」を意味する）広場をはじめ、各地で大規模なデモが行われ、10 月 25 日には 120 万人の大集会が開かれた。横断幕にピノチェトによる軍事クーデターで殺害されたアジェンデ大統領が描かれ、「不屈の民」やビクトル・ハラの「平和に生きる権利」の歌が響くなど、民衆のデモがさながらピノチェト独裁との闘いの様相を見せ、一方のピニェラ大統領も戒厳令を出し、武装警察を投入して催涙ガス、放水、ゴム弾でピノチェトを彷彿とさせる弾圧を繰り返した。この結果、30 人を超える死者と夥しい負傷者、7 千人もの逮捕者を出した。

エクアドル、チリの闘いは伝統的な親米国家コロンビアをも揺り動かした。10 月 10 日、ドゥケ大統領が打ち出した労働と年金の改革法に反対し、コロンビア中央労働連合が「コロンビアも目覚めた」と宣言、全国ストライキ委員会を組織し最初の街頭行動に出た。

コロンビアでは、2016 年、キューバのラウル・カストロ（当時）国家評議会議長が仲介し、政府と武装ゲリラ組織 FARC の歴史的合意（ハバナ合意）が成立、FARC の武装解除が行われたが、ドゥケ政権のもとで FARC メンバーをはじめ社会活動家や野党指導者の暗殺が相次ぎ、犠牲者は 300 人にのぼっている。コロンビア中央労働連合は公式声明で、生活防衛とともに平和を守るため「ハバナ合意の実現」も要求している。

11 月 21 日には数百万人が街頭に出て全国統一抗議集会が行われた他、12 月、1 月にも大規模なデモが行われ、2 月の全国ストライキ委員会戦術会議では 6 月までの闘いのスケジュールも固められていた。

■ 左派政権誕生—アルゼンチン

6 月 27 日から大阪で開催された G20 サミットのため来日したアルゼンチンのマウリシオ・マクリ大統領は府内のスーパーマーケットを訪れ、アルゼンチンの牛肉を熱烈にアピールした。売り場で「日本のグルメな皆さんにもきつとご満足いただけたらと思う」とにこやかに語るマクリ大統領をニュースで見て、私は激しい違和感を持った。というのは、その頃、南半球の国アルゼンチンでは冬の寒空のもと路上生活者の餓死や凍死者が続出し、政府はやむなくサッカースタジアムを開放したというニュースを原文で読んだからだ。

アルゼンチンは食糧自給率 200%を超え、世界第 6 位の牛肉生産量を誇る。そんな国で国民が飢え、大統領が地球の反対側で「どんどん食べて」とトップセールスしているのだ。数字が苦手な経済に疎い私でも、新自由主義がいかに矛盾した非人間的なものであるか、これでようやく理解した次第である。

こうした矛盾にアルゼンチンの人々は 10 月 27 日の大統領選挙で答えを出した。8 月の予備選挙から大衆の熱狂的な支持を集めてきたアルベルト・フェルナンデス大統領候補とクリスティーナ・フェルナンデス副大統領候補の『ダブル・フェルナンデス』圧勝でマクリ政権は 1 期 4 年で終止符が打たれた。

アルベルト・フェルナンデス新大統領のメッセージは極めてシンプルで、「最も必要としている人々を最優先に」と繰り返し訴え、12 月 10 日に大統領に正式に就任して以降、家のない人々に家屋を提供する「尊厳ある家プラン」、低所得者に対し食料品店で使えるプリペイドカードを発給するなど、言葉通りの政策を次々と実行に移していった。

こうした政治姿勢は、現在進行中のコロナウイルス対策でも際立っている。全国で 12 の病院を新たに建設し医療崩壊を食い止める一方、国民に必要な最小限の外出以外は家に留まる「社会的隔離」を生活・雇用・住居の保障と一体で進め、医療、運輸、建設、農業など必要な部門の労働者に対しては自ら話し合いをもって理解を深めるとともに、全国民に感謝を日々呼びかけている。「私たちが家に留まれるよう働いている人々に感謝を。アルゼンチンは今、かつてなく団結している」と。

4 月 10 日、「社会的隔離」の延長を発表したフェルナンデス大統領の会見が終わると同時に家々の窓から一斉に拍手と歓声が起きる動画をたまたま見た。市民が自宅で撮影してネット上にアップしたものだ。先に挙げたエクアドル、チリ、コロンビアでは人々が「新自由主義のもとでは生きられない」と必死で闘ったが、パンデミックは無情にもその勝利を待たず襲ってきた。アルゼンチンは寸でのところで間に合ったと言えるだろう。



アルゼンチン大統領選挙勝利を祝う左派陣営

■ クーデターに揺さぶられる左派政権 ーボリビア・ベネズエラ

10 月 20 日、ボリビア大統領選挙が行われた。先住民出身の現職エボ・モラレス大統領が右派の野党候補カルロス・メサを下すのは明らかで、焦点は 10%以上の得票差

をつけて決選投票なしで当選を決められるかどうかだった。得票は開票率約 9 割の段階で得票差は 7.12%で決選投票となるかと思われたが、開票が遅い地方の山間部で圧倒的な支持を持つエボ・モラレスが開票残り 1 割で 10%を超える差をつけて当選した（最終得票：エボ・モラレス 47.08%、カルロス・メサ 36.51%）。これに対し、極右勢力が「不正選挙」だと騒ぎたて各地で暴動を起こした。特に狙われたのは選挙管理委員会で、暴徒は建物に火を放ち票を焼いた。右翼の暴力にエボ支持者も支援集会を開いて対抗、エボ・モラレスも再選挙の可能性にも言及したが暴力は止まず、官邸、エボ・モラレスの親族、閣僚の家などが次々と襲撃された。決定的だったのは、南米のクーデターに付き物の軍と警察の離反だった。のちにエボ・モラレスが「護衛官に私の身柄を引き渡す見返りに 5 万ドルを支払われた」と証言した通り、金が動いていた。軍幹部がエボ・モラレスに辞任を迫り、命の危険が迫る中、2018 年に発足したメキシコのロペス・オブラドール左派政権が動いた。11 月 11 日、エボ・モラレスはアルバロ副大統領らとともにメキシコが差し向けた空軍機でボリビアを脱出したが、このとき米国に追隨するエクアドルは上空の通過を許さず、迂回を余儀なくされたという。

エボ・モラレスが出国すると、ボリビア上院議会の副議長アニェスが暫定大統領を名乗った。議長はじめ与党議員が脅迫によって登院できない中、法的な定足数に満たない議場で宣誓を行ったアニェス自称大統領の就任を、クーデターの後ろ盾と見られるアメリカと米州機構は直ちに承認し祝福した。アニェス「クーデター政権」は軍と警察に「免罪符」を出してエボ支持者たちの抗議に激しい弾圧を開始した。武器使用から殺害まで、何が起きても軍と警察は無罪とした通達は殺人許可書とも言えるもので、先住民の人々を中心に多くの人々の血が流された。

現在、エボ・モラレスは先に触れたフェルナンデス大統領の計らいで隣国アルゼンチンに移り、政治活動を続けている。アルゼンチンで開かれたエボ・モラレスの出身政党 MAS（「より社会主義へ」党）は 5 月 3 日に予定された大統領選挙に向けアルセ大統領候補を選出して臨むことを確認したが、コロナウイルスの影響で選挙は延期された。

ここで、エボ・モラレスが大統領を務めた 2006 年から 2018 年までの実績を見てみよう。

- ・ 非識字率 13.0%→2.4%
- ・ 失業率 9.2%→4.1%
- ・ 中程度の貧困率 60.6%→34.6%
- ・ 極度の貧困率 38.2%→15.2%

モラレス在任中、経済は十二年連続で上昇、国内総生産の平均成長率は 4.8%に達し、国民所得の大幅引き上げで厚い中間層が形成された。

次に見るベネズエラで「国民が飢えている」と言い立ててクーデターを煽動しているアメリカや米州機構が、経済が安定しているボリビアでクーデターを支持し後ろ盾になっているのはなぜか。電気自動車、スマートフォンの製造に必要なリチウムは将来的に石油に代わる重要な資源と考えられているが、世界の埋蔵量の実に 6 分の 1 がボリビアにあることと関係があるのではないだろうか。エボ・モラ

レスはリチウム鉱山を国営で管理し、リチウムを一次製品として輸出する途上国の役割を脱して電気自動車を製造し二次製品として輸出することまで想定していたと思われる。電気自動車の第一号試作品に乗って得意満面で山道を走行して見せたのも束の間、クーデターで政治亡命を余儀なくされた彼の無念は測り知れない。



メキシコに到着したエボ・モラレス（前）大統領

ボリビアと対照的にベネズエラのマドゥロ政権は一年以上クーデター策動に揺さぶられながらも粘り強く闘い続けている。違いは、エボ・モラレスとニコラス・マドゥロのキャラクターの違いもさることながら、軍出身のチャベスの後継者として彼の遺産である「軍民一体」路線を受け継ぎ、チャベス路線を愚直なまでに実行するマドゥロを軍が支持していることが大きいだろう。逆に、ボリビアであればほど高い支持率を誇っていたエボ・モラレスが軍と警察を掌握していなかったことが不思議でならない。

一昨年、グアイド暫定（自称）大統領の登場以降、度々日本のメディアでも「混乱するベネズエラ」が取り上げられてきたが、そうした記事は判で捺したように「独裁色を強めるマドゥロ大統領」の一文から始まる。しかし、事実はまったく異なる。マドゥロは一貫して野党勢力に話し合いを呼びかけ、ノルウェーの仲介で3回にわたって会談を持った。そのたびに「決裂」と報じられたが、あくまでも「野党指導者グアイド」との決裂であって、他の野党指導者とは一定の合意に達し、一時の混乱は収束しつつある。

ところで、メディアでのグアイド氏の肩書がかつての「暫定大統領」から「野党指導者」に転落したことにお気づきだろうか。彼を大統領と呼ぶのは、氏をアメリカ議会に招待し教書演説の中で「彼こそアメリカが考える真の合法的な大統領だ」と語ったトランプ大統領くらいだろう。というのは、グアイド氏が場合によっては法的に「暫定大統領」となり得たのはベネズエラ・ボリバリアーナ憲法で「大統領が職務を続行できない場合、国民議会議長が暫定大統領として次期大統領の就任まで大統領の職務を負う」と定められているからだ。しかし、マドゥロ大統領は健康そのもので日々職務に精を出している上、グアイド氏は今年1月5日に国民議会議長に選ばれず、野党「正義第一党」のルイス・パラ氏が選出されて国民議会議長に就任したため、二重に「大統領とはなり得ない」のである。

このときのベネズエラ国民議会の混乱を報じたメディア（購読している毎日新聞）は「大統領2人ー混乱1年」と

見出しを打ち、「議長も2人誕生」と小見出しを添えた。大統領2人のうち1人はグアイド氏、議長2人のうちの1人もグアイド氏である。いくら空想の世界でも大統領と議会議長を兼任したらそれこそ独裁だろう。私がツイッターでフォローしているベネズエラ人はこれを「グアイドのナルニア王国」と揶揄して笑いを誘った。

報道では、「グアイド氏が議場を不当に締め出された」という事実と異なる記事と門扉をよじのぼる氏の写真が掲載されたが、このときの事実は以下の通りである。

- ① 午前11:45、グアイド氏は免責されていない5人の議員と一緒に入ろうとして問責を受けた。このうち何人かは、例えば4月30日のクーデター未遂の共犯で逮捕状が出ており、議場への入場を禁止されていたが、グアイド氏は「全員入れるか誰も入らないか、どちらかだ」と主張し譲らなかった。
- ② 国家警備隊はグアイド氏に入場させようとしたが、問題は免責されていない議員たちだった。グアイド氏はその一人、ヒルベルト・ソホと一緒に入ろうとして止められていた。記者が「彼は議場に入場する資格がないのでは？」と聞くとグアイド氏は「お前は検事か？くそったれ」と記者に応えた。
- ③ ヒルベルト・ソホについて国家警備隊は再度チェックを行い、国民議会の国家警備隊マラグラ隊長が「彼と同行はできません」と言うので、グアイド氏は「彼の認証が済むまで我々は入らない」と応じた。
- ④ グアイド氏が入場を拒否している間に、議場では議会の役職者を選出するための委員会が設置され、約3時間の遅延が法的根拠となり、最高齢の議員の発議で投票が行われた。

そこで、門扉によじ登って「締め出された」アピールした、というのが真相である。

この他、「定足数を満たしておらず議長選出は無効だと現地の報道もある」と伝えた有力紙もあるが、議員総数167人のうち出席140人が出席、81人がルイス・パラ氏に投票している。素人でもネットでこれだけの情報がとれる時代に、現地の名前も明らかにされない報道を口実にグアイド派の嘘を堂々と垂れ流す姿勢には疑問を禁じ得ない。

ルイス・パラ新議長は「憲法を守る」と宣言し政府との話し合いを基調に外圧とクーデター策動で疲弊している国を立て直す方向に進もうとしている。アメリカはさっそくルイス・パラと彼に投票した議員全員に制裁を課すと息巻いているが、それが逆効果だということに気づかない。



ベネズエラのコロナウイルス対策は「家から家へ」

一方、ベネズエラのマドゥロ大統領が今、立ち向かっている相手は孤立を深めるグアイド氏ではなく、コロナウイルスである。アメリカはこうした最中にも3月26日、マドゥロ大統領の首に1,500万ドル(約10億8000万円)の懸賞金をかけて軍部にクーデターをさかんに煽っているが、その中で果敢にパンデミックとの闘いの先頭に立っている。

ベネズエラの強みは地域ごとに作られた「コミュニティ」が機能していることだ。キューバからの医療支援を受けてキューバ人医師と現地の医師がセットでコミュニティに入り、家庭訪問で疑いのある症状を見つけ次第、早期に検査を行う「家から家へ」作戦を展開している。また、ネットでも自覚症状のアンケートを取り、疑わしいケースは家庭訪問で同様の措置をとる。日本でもLINEを通じて厚生労働省からの調査が再々届くが、ベネズエラのようなフォローがない調査に何の意味があるのだろうか。検査数を比較すれば日本78,702件に対しベネズエラは203,108件、100万人当りの検査数は日本の622件に対しベネズエラは7,143と、実に10倍もの検査を実施している。こうしたベネズエラの緻密な取り組みは感染者189人、死者9人という低い数字にはっきりと表れている。

尚、ボリビアのコロナウイルスの感染者は354人、死者28人との数字が出ているが、発足と同時に、それまで協力を仰いできたキューバ医療支援団の医師たちを追放したクーデター政権のもとで状況がコントロールされているのか、数字の信憑性を疑わざるを得ない。そもそも医療に不足がなければキューバ医療支援団は入らないことを思えば、検査数が全体で2,185件、100万人当たりの検査数は187件と少ないのも当然であろう。

(コロナウイルスに関するデータは「ワールドメーター」調べ：4月13日現在)

■ 国際連帯を貫く社会主義国—キューバ

世界中で猛威をふるうコロナウイルス。中でも感染拡大によって死者が続出したイタリアのロンバルディア州(州都はミラノ)にキューバから52人の白衣の戦士が駆け付けた。ヘンリー・リープ隊と名付けられた国際医療支援団の医師たちである。

第一次独立戦争(1868年-1878年)に外国人でありながら独立軍の准将としてスペインと戦ったアメリカ人の青年ヘンリー・リープはキューバでは国際主義の模範と言われており、彼の名を冠したヘンリー・リープ隊は政治体制の違いを超えて自然災害や疫病に見舞われ助けを求める国に駆けつけ、国際主義を身をもって示してきた。現在まで支援団に参加した医療従事者はのべ40万人、支援を受けた国は164カ国にのぼる。

今回、コロナウイルスとの闘いで、イタリアのロンバルディア州(州都はミラノ)、ピエモンテ州(州都はトリノ)をはじめとするヨーロッパ、アフリカ、中東、ラテンアメリカ、中米・カリブ地域、合計21カ国に1200人の医師、看護師、専門家からなる医療支援団を派遣している(4月19日現在)。



イタリアで医療支援にあたるキューバ人医師たち

こうしたキューバの国際支援活動に対し、アメリカは「金のためだ。しかも医師たちには支払われず国に収奪されている。キューバの医師は奴隷と同じだ」と侮辱的な宣伝を行っている。また、キューバとベネズエラが麻薬取引に関与しているというデマを盛んに流し、経済封鎖をさらに強化する構えさえ見せている。

しかし、世界は見ている。この間、国連をはじめ、スペイン、カナダなど西側諸国からも「パンデミックに直面している中で、非人道的な経済制裁は即刻やめるべき」との見解が相次いでいる。命を守るのは誰か、命を奪うのは誰か、コロナウイルスによるパンデミックが、皮肉にも夥しい人の命を奪いながら明らかにしている。

現在、世界が対峙しなければならない危機の中で、人類は分岐点に立たされている。

主に先進資本主義国がコロナウイルスの潜伏期間である二週間、経済を止めることができずウイルスを蔓延させてきた。新自由主義的資本主義モデルの失敗は明らかだ。

その一方で、「14日間の社会的隔離」に踏み切り、感染の状況を見て期間を延長したアルゼンチン、国際協力を仰いで徹底した防御策で感染を最低レベルに抑えているベネズエラ、国内でもコロナウイルスと必死に闘いながら国際的な医療支援に乗り出しているキューバ、これらの国はパンデミックという先の見えないトンネルの中で、行く手を照らす一筋の光のように思える。

CUBAPON 事務局次長 村上久美子
(月刊社会主義5月号掲載記事)

セニョリータの

キューバ&ラ米★ウォッチ



※ アメリカの裏庭と呼ばれ、常に搾取と収奪に晒されているラテンアメリカ。ここには大国の横暴を許さず、平和と平等を求める人民の闘いがあります。

※ 不定期でキューバとラ米地域の出来事をメールで配信しています。ご希望の方は、こちらのアドレスまでご一報下さい↓

jvccpf@rmail.plala.or.jp

2020秋★(予定) CUBAPON平和友好訪問団

参加者募集



と き：2020年11月28日～12月5日(8日間)
※ コロナウイルスの状況で日程変更の場合もございます。

	都市名	スケジュール	食 事
1	羽田発 ハバナ着	午後：エアカナダで空路、トロントへ 国際線乗継ぎ、ハバナへ	朝：機 昼：機 夕：×
2	ハバナ サンティアゴ	【世界遺産】ハバナ旧市街・モロ要塞、革命博物館、 小説「老人と海」舞台コヒマルなど	朝：○ 昼：○ 夕：○
3	サンティアゴ	サンタ・イフィヘニア墓地でフィデルのお墓参り モンカダ兵営、サンティアゴのモロ要塞など	朝：○ 昼：○ 夕：○
4	サンティアゴ ハバナ	ピランのフィデル・カストロの生家を訪ねる他、 モンカダ兵営襲撃ゆかりの地、シボネイ農場など	朝：○ 昼：○ 夕：○
5	サンタクララ	チェ・ゲバラ廟、ゲバラ博物館、カピーロの丘、 列車転覆博物館など、チェゆかりの地を訪ねる	朝：○ 昼：○ 夕：○
6	ハバナ	診療所視察、友好協会・労働組合中央本部表敬訪問、 ハバナ市内にてショッピングなど	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	ハバナ発	早朝、エアカナダで空路、帰国の途 トロント経由、羽田へ	朝：○ 昼：機 夕：機
8	羽田着	午後：羽田着 お疲れさまでした	昼：機

※ 日程は諸事情により変更になる場合があります。
※ 詳細が決まり次第、ご希望の方に資料を送付しますので、ご連絡下さい。(03-3268-6014：IFC 鎌田)

CUBAPON 2019年度収支

(19年6月1日～20年5月21日)

支出		
会報印刷代	42,400	58号、59号
その他印刷代	66,528	チラシ、封筒、資料
送料・送金料	122,000	会報、連絡、郵振など
事務局諸費	24,487	会議費、ベネズエラ集経費、HP分担費等
事業費	143,250	22回訪問団経費補填(日系人会関係経費含)
資料代	29,000	訪問団報告書買取、他
借入金返済	16,839	18借入 160,360 円のうち
計	444,504	
収入		
会費	159,000	53人
19寄付金①	60,000	CUBAPON 活動へ寄付(15件)
19寄付金②	98,000	ベネズエラ支援活動カンパ
19寄付金③	30,504	IFCC より DM 送料分担として
繰入金	97,000	18電巻被害支援カンパプール金
計	444,504	

※電巻被害支援カンパ 97,000 円は 22 回訪問団の青年の島日系人会経費で執行
※19年度繰越借入金残は 143,521 円
※DM 料金アップにより「送料代」がアップしました

■ 世界が驚嘆する「連帯」を育んだ革命

「連帯は言葉ではなく行動だ」。

フィデル・カストロ革命最高司令官の思想を守り、コロナウイルスで死者が続出するイタリア、ロンバルディア州をはじめ世界各地に医療支援団を送るキューバに世界は驚嘆し、惜しめない拍手を送りました。

キューバの国際主義、人道主義、連帯精神の源である革命の歴史に触れるとともに、医療現場の視察を通じて、命を何よりも大切にする社会モデルを垣間見る旅に出かけませんか。

■ 革命のゆりかご

サンティアゴ・デ・クーバへ

キューバ革命の始まりとなった「モンカダ兵営襲撃」の舞台となったサンティアゴ・デ・クーバは「革命のゆりかご」と呼ばれ、革命戦の激しさと公正な社会を目指し闘いに身を投じた若き革命家たちの足跡を今に伝えています。

革命に生涯を捧げたフィデル・カストロの生家、彼が眠るサンタ・イフィヘニア墓地を訪ね、フィデルに思いを馳せながら、革命 61 年目のキューバの「今」を体感する「2020 秋★CUBAPON 訪問団」にぜひご参加下さい。

TROPIC-TOUR アイエフシー

はCUBAPON関連の手配旅行社です
キューバをあなたに届けます

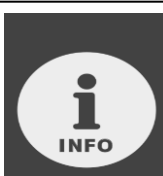
- ◆ アイエフシーはIFCC国際友好文化センターの関連旅行社です。“人と人との出会い”を通じた友好・交流プログラムを演出します。
- ◆ アイエフシーは文化、政治、福祉、環境分野の視察、研修、調査のプログラムをお手伝いします。
- ◆ アイエフシーはキューバなど中南米、ベトナム・中国などアジア、ドイツなど西欧、デンマークなど北欧のプランニングを行っております。

東京都知事登録旅行業第3-3757号

〒162-0801

東京都新宿区山吹町333番地 辻ビル405

TEL 03-3268-6014 FAX 03-3268-6079



●「化城宝処(けじょうほうしよ)」という法華經に説かれる7つのたとえ話のうちの一つに触れた。先が見えない時でも「仮の目標を描き、向かい歩き続ける」ことで目標を達成すること—だという。COVID-19 禍で活動を自粛することは自殺に等しい。

●「持たざる者」の力の源泉は人の「交わり」と「結び合い」にしかない。COVID-19 禍を利用した“持てる者”による分断と孤立の策動には「友好と連帯」を対置していくしかない。(CUBAPON 事務局長：鎌田篤則)